

ミシェル・セールにおける雑音と有機体

縣 由衣子

はじめに

本論文では、ミシェル・セールの初期思想における雑音と有機体の概念の分析を行う。

セールの初期の論考、特に『ヘルメス』においては、カオス、雑音、騒音、デモン、妨害者、混沌という言葉が繰り返し使われており、その初期の思想における一つの主要なテーマをなすものといえる。一方で、『新新科学的精神』の哲学の名の下に展開される同時代の科学、主としてブルバキの構造概念と、サイバネティックス、そして情報理論の哲学への移入もまた重要な問題系をなしている。『ヘルメス』の各巻において、コミュニケーションと、それを妨害するものというこの両者の対立は、理性と非理性、科学と非科学、秩序と無秩序といった典型的な関係をなしているかのようであり、彼の思想的な独自性は同時代の科学を取り入れることで、その関係の位相をずらしたことにあり、という指摘も少なくない。

しかし、セールの初期の思想の特異な点はむしろ、この両者の結び結ぶ関係自体を変化させたところにある。そうすることで、一方が成立すればもう一方は成立しなくなるといったような論理的な背反性から自由になり、その可能性を広げたところにこそ、その思想的革新性はあるのではないだろうかと思われる。

本論文では、このことを論証する上で、セールの雑音という概念に着目することにする。科学認識論的なテーマの確立と発展に終始した第一巻から第三巻までの内容から一転して、『ヘルメス』の第四巻目『分布』では、混沌や雲、腐敗、雑音といったものが主題となり、その文章的な複雑さからも『ヘルメス』の中でもっとも読解が難解であるという指摘がされている。『分布』の冒頭で、セールは次のように述べる。

ついに、はじまりである。

はじまりには、混沌がある。今日ではわれわれは、それを雑音、暗騒音といっている。言葉はどこから生まれてくるのがお望みだろうか。それが雑音からでないとするならば¹。

気象現象は見かけ上の無秩序にあるが、法則が支配する二つの秩序の間にある

一つの例外的なものなのだと思われていた。その逆なのだ。つまり、反対に、秩序付けられた古い諸システムは、もっとも小さな世界からもっとも大きな世界まで絶え間なく続いている海の上の数少ない島々でしかもはやないのだ。〔中略〕秩序は、無秩序がありふれている状況の中にある希少な事態なのだ。例外のものが規則になり、規則が例外のものになるのである²。

ここで、セールが述べようとしているのが単に理性的、秩序的なものが一般的であり、非理性的な混沌が特異的なものであるという伝統的な認識を逆転させその対立を超える超越論的な客観性を見出したという **Crahay** の指摘は確かに間違っているわけではない³。そして、情報理論を哲学的な分野に読みこんだことをセールの業績とする **Harari** と **Bell** のような指摘もある⁴。しかし、セールが目指すのは、さらにそのもう一段階先であり、この逆転によって生じるものが果たしてなんであるのか、ということの解明はいまだ不十分であるといえる。

『分布』において、様々に言い換えられるこのカオス的なものの中でも、雑音というテーマを主題的に扱ったものとして第十章「暗騒音」がある。セールが「暗騒音」で提示する雑音の姿は、デカルトにおいて言われていたような理性を妨害するものではない。あるいは、バシュラールにおいて詩として定義されたような、科学とは独立した価値を持つものでもない。セールは雑音こそが、理性や情報といった秩序だったものを生じさせ、あるいはそれらが認識可能となるための条件に寄与するものであることを示唆する。そして、それによって、雑音それ自体の記述可能性を拡張させるのと同時に、秩序にもまた新たな権利を保証するのである。

1. 有機体

「暗騒音」は次のように始まる。

有機体は一つのシステムである⁵。

ここから議論はしばらくシステム概念についての歴史的な変遷に終始することになり、タイトルにつけられた雑音 **bruit** が始めて登場するのは、本文の中盤に至ってのことである。なぜこのようなプロセスが採られるのだろうか。この問いについての答えはすぐさま明らかになるわけではない。われわれはまず、この問いを念頭に置いたまま、セールの主張に身をゆだねてみることにしよう。

有機体は一つのシステムである。システムの観念は、百科学的 *encyclopédique* な階段を移動することによって歴史の流れの中で変化する⁶。

セールは歴史におけるシステムの流れを次のように概観している。デカルト、ライプニッツ、スピノザにおける古典主義時代に理想として設定されていた論理—数学的なシステムがその第一の段階としておかれ、これは時間の流れに依存しない無時間的なシステムである。次いで、ニュートンによる力学的なシステムの時代が起こる。このシステムは時間的なものだが、反転可能であり、可逆的なものである。そして、これに続き、カルノーの熱力学的なシステムが登場する。このシステムは時間の概念を一変する、とセールは述べる。

それ以来、時間は一つの方向を持ち、非可逆となる。秩序から無秩序へ、あるいは差異から均質の混合対体の解体あるいは拡散へと流れていくのだ。そこからはいかなるエネルギーも、いかなる力も、いかなる運動も生み出されることはないだろう⁷。

言い換えれば、同じく『分布』の中に収められた「原動機」で詳しく論じられているように、物理学の発見によってシステムにおける時間は第二種永久機関を可能にするようなものから、エネルギーが散逸し、エントロピーが増大していくものとして、記述されるものとなったのである。

そして、ここまでの流れに登場したシステムは閉鎖系という性質をその共通項として持つ。閉鎖系は、セールによって「何らかの宇宙における切り取りを形成している」⁸ものとして定義される。たとえば外部からの影響、熱、物質の流れというものを遮断することを条件としてこれらのシステムは成立し、そこに方程式や熱力学的な法則が成立するのである。

ここまでの手続きを通じて、私たちはセールの狙いを次のように理解することができるであろう。セールが明らかにしようとしているのは、デカルト以降の思考の探求が営まれてきた土台となる枠組みを指し示すことなのである。システムという用語を現代のシステム論的に理解すればわれわれは、セールの試みが安易な現代科学主義至上的なものであると判断しかねない。しかし、システムという概念から概念史を編成しなおすことによって、探求の土台となっている条件が次第に明らかになってくる。そして、単なる否定的なもの、非理性的なもの、無秩序的なものとして、否定的に指し示されるものとしてではない雑音を提示するためにセールがどのような土壌を整えようとしているのかもおぼろげながら見えてこないでもない。

システムという概念史の形成が明らかにするのは、古典主義から十九世紀の熱力学の時代が、その思考を成立させる上で、条件付けと排除の手続きを行っていることであろう。このことを別の視点から論じたのが『干渉』の「客観的干渉」であるといえる。バシュラールによって新科学的精神が提唱される以前のデカルトの科学主義においては、普遍的に把持しえないものは、システムから排除されていたのである。そして、この排除の対象をセールはデモンと名づけたのであった。われわれは、また別の箇所、セールがこのデモンをカオスや雑音、無秩序と同列に並べていることを見る。このことから推測するに、この時代、雑音はシステムの内部にはない。それは、システムが成立する条件の時点で、すでにシステムの外側へと追いやられてしまっているのだ。セールは「理論的干渉」において、〈新新科学的精神〉の段階、すなわちセールの段階においては、むしろこのデモン＝雑音は、われわれの外側にあるのではなく、われわれをとりまき、われわれはデモンのただなかに浸っているのだ、ということを示唆していた。その中から科学的対象を掬いだしていくという作業が〈新新科学的精神〉には課せられていたのである。では、この〈新新科学精神〉のデモンは、システムにおいてどのように記述されるのだろうか。

歴史はさらに進み、十九世紀からこの「暗騒音」の時点である二十世紀へと至る。セールは、この熱力学的なシステムの成立を経て、ベルグソンの時代からそれ以降の時代へと哲学の言説に一つの移行が起こったことを指摘している。これまでの諸システムを生み出してきた物質と生命についての研究から一転して、哲学が扱う問題系は、そのシステムの成立条件へと向かうのである。「開いたものと閉じたもの、孤立したものと仕切り」⁹とセールが述べるこの哲学の探求は、一般的なものが宇宙であり、個別的なものが有機的生命体であるような問題系を形成する。このことによって、哲学の研究は、生命と物質についての直接的なものから、言語やテキストを対象とするものへと移るのである。この移行が二十世紀に至ると、情報理論が哲学へと導入されるための前段階を準備することになるのである。

セールの戦略は、ここでさらに明らかなものとなる。システムの概念史という射程は、ベルグソンの時代を経たそれ以降の哲学を一つの契機として見出している。哲学がシステムそれ自体を探求することによって更新されていくことをやめ、システムの成立条件へと焦点を移した、と述べることによってセールは、言説やテキストについての哲学の背後に、十九世紀の熱的システムがその土台として変わらずにあることを指摘しようとしているのである。この点が重要であるのは、「暗騒音」における雑音の位置づけに深く関係している。議論を少し先取りしてしまうことになるが、『分布』においてカオスや無秩序的なもの、あるいは『干渉』においてデモンと呼ばれるものが、「暗騒音」では後に雑音といわれることになるのは、何もセール

の気まぐれな言葉選びによってではない。セールはこれらの様々に言い換えられる概念群をここで、雑音と呼ぶことによって、情報理論から規定することを試みようとしているのである。そもそも、「暗騒音」というこの章の原題は *bruit de fond* である。これは、情報理論の用語であって、日本においてはバックグラウンド・ノイズと訳したほうがむしろ通りがよいともいえる。つまり、セールは本章において常に情報理論を念頭に置き、議論を進めているといえるのである。だとすると、ベルグソンの時代以降の哲学が、依然として熱力学的システムを継続的に土台としている、というこのセールの指摘の意味はおのずと明らかになってくる。なぜなら、情報理論がその理論の中心概念としているエントロピーは、セール風に言うならば、熱力学から「翻訳」されたものだからである。

それでは、システムの概念史に戻ることにして。二十世紀の冒頭に情報理論が生まれ、それがまた熱力学と関係付けられることが明らかになった。それに従って、言説、エクリチュールといったコミュニケーションを主題としていた当時の哲学に情報理論が援用されるようにもなった。前述したように、この時代の哲学は、十九世紀的な熱力学的なシステムを母体としたままで、システムの成立条件を探ることへと問題系を移していた。言説、エクリチュールといったコミュニケーションをめぐる諸問題は、情報理論によって理論的に補強され、記号のシステムとして確立されることにいたったのである。

諸物の伝統的な分類法のそのまさに中心には、とはいってもこの分類法は、物質も生命も記号も、システムの諸特性でしかないのではや意味を持たないものであるが、私がまさに語ろうとしているもの、生きた有機体がある¹⁰。

ここではじめて、セールはこのシステムの概念史の中に、有機体を登場させ、位置づけるのである。しかし、なぜ、セールは有機体こそがこれまで述べてきた諸システムの中心に位置するものと考えてのだろうか。これに対する明確な答えをセールは示しているわけではない。しかし、セールがこれまであげてきたシステムがいずれも何らかの法則、あるいは方程式によって記述可能であったことから鑑みると、セールが有機体を「いまや極めつくされている既知のモデルに換言するのが困難な、高度に複雑な系」¹¹とし、また、「熱力学的かつ情動的な系」¹²と述べていることからその所以を次のように解釈することができるように思われる。セールが概念史としてあげてきたこれまでのシステムは、条件付けを行って「宇宙から切り取り」、方程式や法則によって記述可能なものであった。その点から鑑みると、生命のある有機体とは、「熱力学的かつ情動的」であるがゆえに、これらより「高度で複雑」な一

つの中心とされるのである。翻って言えば、古典主義においては、生命は機械として捉えられ、また熱力学からすると死へ向かってエントロピーをひたすら拡散させながら流れているものとして記述されてきた。しかし、情報理論の移入によって、ここに、「系統発生的な普遍性と突然変異による淘汰」¹³がこの流れに逆らうものであることが明らかにされる。セールの、有機体についての、より高度で複雑な仕方での理解可能性を見出すことによって、有機体を中心とした概念史を編成しなおそうとしているのだということもできるだろう。そして、この再編成の最終目的は、このように有機体を位置づけしなおすことによって、暗騒音あるいは雑音の概念の重要性を浮き彫りにする、強調することにある、と思われる。

セールの有機体のシステムを次のように記述することを試みている。

このシステムはエネルギーと情報とを一度に受け取り、ストックし、交換し、放出する。システムを通過する太陽光から物質の流れまでのすべての形態の元に。〔中略〕このシステムは平衡状態にはない。というのも、このシステムにとって熱力学的な安定が意味するのは、純粹で単純な死だからである。システムは一時的に熱力学的な平衡から隔たっていて、可能な限りその隔たりを維持しようとする。したがって、このシステムは熱力学の第二法則の不可逆的な時間の元に従属させられている。というのも、それは死ぬからである。しかし、このシステムはその死に抗って戦うのだ。〔中略〕いまや、このシステムを閉じて孤立したシステムとすることは、おそらくその遺伝子は別として不可能なのだ。これは開いたシステムなのである¹⁴。

セールが編成した概念史の流れの中におかれて始めて、われわれは有機体のシステムとしての特異性を理解することになる。それは、生氣論的なものとも、スピリチュアリズム的なものとも、ましてや機械論的なものとも異なった有機体の姿である。開放系としてのシステムの有機体をセールはホメオレイシス *homéorrhése* 的という造語によって形容している。それは、恒常的な静止状態を示すホメオスタシスではなく、死に抗い恒常的な流動状態を保とうとする、相対的な安定性を保った状態を意味しているのである。

しかし、ではホメオレイシスのシステムがセールにおける有機体の定義である、と判断してしまうのは早計に過ぎる。われわれは「モナドの干渉」において、セールが何らかの概念を定義することの危険性、あるいは現代における無効性を論じたのを見ることができるからである。セールは、有機体はホメオレイシスのシステムとして、「推定され、記述され、評価され、理解される」¹⁵のである、としている。

ここにあるのは、「理論的干渉」あるいは「客観的干渉」の変奏である。デカルト主義のように、観念を定義してしまうことでデモンを追放し、対象を見ずに主観に引きこもったことを乗り越えようとする〈新新科学的精神〉の哲学は、デモンを追放せずに戦略的に生産を行ううえでの一つの手段として提唱されたのであった。では、ホメオレイシスのシステムとして、有機体を「理解する」ことで、われわれは何を得ることになるのだろうか。それこそが、雑音なのではないか、と本論文は推測することにしたい。否定的なものとしてのみ指し示されるのではない、新しい雑音の形なのである。

2. 雑音

セールは、ここにきて初めて、雑音について言及することを始める。これまでの前提を踏まえるならば、情報理論的なものでもありとされた有機体における雑音は次のように予想されるかもしれない。たとえば系統発生を保とうとする集団的な有機体のコミュニケーションを妨害するものとしての雑音や、あるいは、われわれが耳にした情報を理解しようとする際にそれを妨害する雑音といったようなものである。たしかに、セールがここで提示しようとしている雑音の概念は、それを一例として含んでいるといえるであろう。しかし、有機体において雑音を考える際にセールが想定している事態は複雑であり、なおかつ根本的なものである。

議論を先取りして言えば、セールは、雑音をシステムの機能それ自体を形成するものとして捉えようとしているのである。先に述べた例は、たしかに、コミュニケーションをめぐる問題として情報理論的に分析可能なものであるが、むしろ、この機能の結果として出力されるものの分析に過ぎない。そうではなく、ここで問題となるのは情報と雑音とがシステムの機能によって選別され、なおかつ、それが認識される、というプロセスに関するものなのである。

この有機体は呼吸器系、自律神経系といったものから細胞、分子にいたるまでの様々な位相の異なるシステムが入れ子状になっているシステムを形成しているとセールは述べる。そしてそれぞれの複合体は膨大な数の化学反応を行っており、その数は有限ではあるが、膨大なものに上るはずであるとしている。そして、雑音はこの膨大な化学反応をめぐる問題提起されるのである。

熱、そして情報の点から見ると、これらの運動や変化が暗騒音を発生させるのは不可避である。そして、この雑音は、言われている数が莫大であるから、きっと途方もないものなのだ。どうしてわれわれはそれを聞かないのだろうか¹⁶。

注意しておくべきことは、セールがここに述べた雑音 **bruit** は単に音響的なものをさすのではない、ということだ。ここで言われているのは、熱力学的な雑音、つまりブラウン運動が発する不規則な熱振動によるノイズ **bruit thermique** や、情報理論において定義されるノイズ **noise** であり、コミュニケーションの成立や熱の生産といった目的に伴って不可避免的に発生するもっと広義のものとして捉えるべきである。また、セールは次のように述べてもいる。

ライブニッツは既にそのことを彼の言い方で言っていた。内側と外側の微小表象の雲はわれわれの気分を悪くし、めまいへとみちびくようになる。そしてそれは耐え難いものになる、と¹⁷。

それはけして音響的な雑音ではなく、これらの膨大な化学反応に生じるノイズなのである。とはいえ、この雑音は、ライブニッツにおける微小表象の雲と全く同義のものではない。なぜなら、熱力学的、あるいは情報理論的なものとしてこの雑音を捉える場合、この雑音はそれを観測する観測者を伴い、なおかつ、それは実験的に存在が検証可能なものであるからである。

そして、有機体が問題となる限りで、その観測者とはその有機体そのものであるわれわれに他ならない、とセールは述べる。だとすれば、この存在していることは確かなこの膨大な雑音を、なぜ観測者であるわれわれは感知しないのだろうか、という問いがセールによってたてられるのである。

セールの議論に戻ることにしよう。入れ子状のシステムになっている有機体の諸形態は次のように記述されている。

入れ子状のシステムの何らかのレベルがあるとする。それは局所的には先に見たようにある温度での化学反応の複合体として機能する。〔中略〕このレベルは情報を動員し、暗騒音を生産する。入れ子状をなす系列 **série gigogne** のこれに続くレベルは、前のレベルで放出された情報—暗騒音の対 **couple** を受け取り、操作し、一般に統合する¹⁸。

この統合とは何を意味しているのだろうか？セールは次のように説明している。

実際、二つの観測点の間で何らかのチャンネルを通じて交換される情報量を与える方程式のほかに、その二つの観測点とチャンネルを含んだ集合の情報量を与え

る方程式を書いてみると、計算に登場するある種の関数に符号の反転が生じるのである。言い換えると、この関数は雑音に起因する散布度 *ambiguïté* といわれるものなのだが、これは、観測者がその立場を変化させると、向きを変えるのである。つまり、観測者が当該のレベルに身をおいているのか、あるいは、その集合を次のレベルから調べているのか、に応じて。ある意味では、この過程は、整流器 *redresseur* として、特に雑音の整流器として機能するのだ。すべてのメッセージの通過の障害であったものが、逆転し情報に付け加わるのである¹⁹。

言い換えるならば、ある任意のレベルのシステムがあり、そのシステムが情報処理を行うとき、その過程からは必然的にその情報の抽出を妨害する雑音が生まれる。この雑音は、このレベルのシステムにおいては情報の伝達を妨げる妨害者に過ぎない。しかし、この情報と雑音とがそのレベルを包摂するより上位のレベルのシステムに統合される際には、この雑音は散布度という尺度を通じて、この次のレベルにおける情報となるのである。とはいえ、ここでのセールの意図はいささかわかりにくいので、このプロセスについて「暗騒音」の別の箇所ですべられた記述を引用してみることにしよう。

二つあるいは幾つかの要素からなるシステムがあるとする。[中略] もしシステムが組織されているとすると、要素は相互に関係しており、結果として異なっていると同時に類似してもいることになる。ここに散布度が登場するのだ。システム内部の視点からは、なんらかのチャンネルを通じてのある要素から別の要素への情報の伝達は、散布度の控除を行うのである。それは雑音であり、メッセージの妨害物であるからだ。システムの外部にいる観測者にとっては、散布度は正の量として勘定されなくてはならない。なぜなら、それは複雑さを増大させるものだからである。このとき、雑音は、複合体を組織するレベルにおける情報として機能する。雑音はこちらでは覆い隠すのだが、あちらでは表現しているのだ²⁰。

従って、雑音は、観測者に依存している、と言い換えることができるように思われる。システムの内部においては、コミュニケーションを妨げていたものは、外から見れば（この外、というのもより上位のレベルのシステムの内側なのであるが）、下位レベルのシステムからのアウトプットの情報量をより増大させることに寄与するのである。

これまでの流れを一度概観しておくと、次のようなものになる。セールは、システムを概念史として編成することで、有機体を、熱力学的かつ情報理論的システムとし、またそれがこれまでの機械論的、熱力学的有機体論を超え出るホメオレイシス的なものとして想定可能である、という前提をまず作り上げた。その上で、このような前提から導き出されるのは、このようなシステムで有機体があった場合には、そこには、理論的には膨大な雑音が存在しているはずなのであるが、それはなぜわれわれには感知されないのか？という問いであった。情報理論を援用することによって、セールは、莫大なシステムが入れ子状になって複合体を形成していることによってなりたっている有機体のシステムの性質そのものが、この轟音を漸次的に整流化する役割を果たしていることを明らかにする。そして、この有機体は、開放系であることで、つまり、様々な物質やエネルギーの流れを受け取り、貯蔵し、送り出す開放系として、熱力学の第二法則に従う結果としての死に向かって流されていくことに抗っているのであった。だとすれば、このとき、雑音は、この有機体の死への抵抗を妨げるどころか、開放系であり続けるための膨大な情報処理へとむしろ寄与するものである、ということが指し示されたのである。

このセールの分析は、これまで否定的なものとして指し示されることによるのみ記述されてきた妨害物一般の新しい認識の可能性を導き出す。そして、それはまた同時に、否定的なものを排除することによるのみ、自らを認識することを可能にしてきた秩序的なものの新しい可能性をもまた同時に意味しているのではないだろうか。

ところで、提示されてきた有機体のシステムにおいては観測者の存在の重要性というものがしばしば示されてきたのであった。有機体のシステムにおいては、雑音は、観測者に依存した相対的なものが示されたからである。とはいえ、この有機体を観測するのはわれわれである、ということが先ほど確認されたのではあるが、内部で入れ子状をなす膨大な諸システムのそれぞれ、たとえば、分子のシステム、呼吸器のシステムなどを逐一観測し、感知しているわけではない。個々のシステムの観測者は、全く実験的な、理論上想定されたに過ぎないものだ。では、われわれはどのような仕方での有機体を観測しているというのだろうか。われわれが観測者として観測するものはいったい何なのだろうか。

ここで初めて、セールは、われわれ観測者の観測手段という問題において、有機体と雑音をめぐるこの議論が、言語にかかわるものであることを明らかにする。この「暗騒音」には「言語の起源」という副題がつけられていたのだが、われわれは初めてその副題へとテーマを移すことができるようになるのである。「言語の起源」がこの章の隠されたもう一つのテーマであったと考えるとき、すぐさま想起される

一つの予測は、セールにおいては情報に先立ち、より一般的なものとされている雑音こそが、言語の起源である、というような、雑音＝言語の起源という構図である。とはいえ、それはここで問題にされるわれわれ観測者の観測手段という問題とは、直結できるような手がかりを持たないように思われる。では、セールはこの観測手段と、言語の問題をどのように結びつけているのだろうか。

さて、この〔観測をするための〕装置はそこにある。それは、古典哲学が内部感覚 *sens interne* と名づけたもの、あるいは心理学者たちが次々と感情移入 *intropathie*、自己受容感覚 *proprioceptivité*、体感 *coenesthésie* などといったように記述しえたものである。その働きは、迷走・交感神経のシステムによって放出され、受け取られる諸信号に結び付けられなければならない。〔中略〕しかしながら、この装置は、われわれが快感と苦痛という二つの大きなカテゴリーのもとに統合しているような諸信号を知覚する。それらを受け取り、送り出すのである。〔中略〕このとき、快感と苦痛が逐次的な統合の全体によって交互に濾過される一般的な聴取 *écoute* の最後の状態を構成しているかのように、すべては起こっているようなのである²¹。

有機体のシステムをわれわれが観測する手段をセールは次のように記述している。このことを言い換えるならば、入れ子状になったシステムに受け取られた情報—雑音の対は、段階的な処理を経て、最終的には、快感—苦痛という対に「翻訳」された、ということもできる。そして、この対は、有機体が相対的な安定性を保つために働くものとして、出力される。もちろん、この快感の中には、雑音があり、苦痛の中にも情報がある、という可能性をセールは示唆している。しかし、われわれはそれを適切な仕方で感知するためのより上位のシステムは持たないのであるから、この快感—苦痛の対は、有機体のシステムにおける極限に位置しているのである。

このとき、セールが「暗騒音」に「言語の起源」という副題を伴わせた所以は、この快感—苦痛の極限から、想定されるもう一方の極限、有機体が物理的な情報—雑音を受け取る上で想定されるもう一方の極限が、言語の機能によって貫かれている、という理解に基づいている。情報—雑音の極限には、物理的に理解可能な情報が働き、快感—苦痛の極限には、何らかの警告であったりするような信号としての言語が働いている。とはいえ、この快感—苦痛の極限における言語は両義性や多義性を伴う複雑性を有してはいる、ということをセールは認めている。しかし、結局のところ、セールは次のように結論付けるのである。

そういうわけで、私にはその含意関係における近傍がしばしばよくわからない多重に統合されたシステムは、雑音—情報という対から意味を備えた感覚—障害という対へと移行する働きを持つ一連の変換であるということが出来る。そして、その統合の一つ一つはフィルターとして、整流器として機能している。すなわち、意味を持たないという条件においてしか取り扱えないシャノンの情報—雑音の対に結局、意味を与えることになる高度に複雑な装置である。情報理論の中心にある問題が生きた有機体によってひとりでに解かれていたかのようにはすべては起こっているようなのである。この有機体は、雑音と情報とから言語を生産する装置であると記述することができるのだ²²。

存在するはずの轟音の大半のかわりに、有機体の観測者であるわれわれが受け取るのは、たとえば内部感覚、あるいは体感といわれてきたような装置を手段として伝えられる快感—苦痛という二項の対であり、これこそが、有機体のシステムが、情報—雑音の対をそのたびごとに動員し、次のレベルにおいて整えるというプロセスを通じて変換することで、最終的に「翻訳」した姿である。そして、このプロセスは、言語が機能することによって実現する、と記述することができる、とセールは述べているのである。

したがって、先ほどの予測は間違っていた、といわざるを得ない。ここから明らかにになるのは、「われわれにとって」言語といわれているものがどのように生まれるのか、という起源の問題である。さまざまなシステムが情報—雑音の対を受け取り送り出している上で、そこにはそれぞれに独自の原—言語が存在している。そして、それらはわれわれにとってもまた、物理的に、情報理論的に理解可能なある種の記号体系をなしている。

だからといって、セールは情報が言語よりより一般的のものである、という、情報ロゴス主義という立場に立つわけではないということがここから明らかになる。そうではなくて、ここから想起されるのはむしろ文化相対主義、あるいは「モナドの干渉」において述べられていたような、人間相対主義、あるいはモナド相対主義とでもいうべきセールの立場である。人間のみならずあまねくモナドが情報を受け取り送り出す形でコミュニケーションを行っているその中の一つのモナドとして、人間も情報を受け取り、また送り出している。そこにおいて、人間が受け取った情報を意味の伴った言語として生成するプロセスがここに示されていると考えることが、むしろ適当ではないかと思われる。人間は、いまやあらゆる情報を理解することができる。言語能力の優れた人がいくつもの言語を理解し、話すことができるように。しかし、母語以外の言葉に働く含みや両義性などを理解することはさらに困

難であろう。セールが、ここで述べている言語とはそのようなものではないだろうか。

そして、有機体のシステムを形成する諸システムにそれぞれの記号系が備わっており、そこに符号反転が共通して働くということから、情報—雑音という対こそが、その入れ子状のシステムという構造によって、意味をうみだすということがここで示唆されているのである。ここからは、システムの内部にいて、情報が伝達される過程を見守る観測者には見出されない意味が、それを統合するより上位のシステムの観測者には、そこに雑音が寄与することによって生成されていくという過程を有機体というシステムが可能にしている、ということができるであろう。そして、われわれは、その有機体というシステムそのものの一観測者に過ぎず、快感—苦痛からの情報のみを母語として意味を受け取ることができているにすぎないのである。

これを一般化すれば、入れ子状になった有機体のすべての段階のシステムにおいて、そのシステム固有の意味が存在し、そこには、われわれには意味のわからないそのシステムの内部の観測者のための言語が働いている。しかし、われわれはそれを情報として処理することができ、なおかつ言語的機能として入れ子状をなすそのシステム全体の連なり *série* を一般化することができるということが出来る。

3. 結論

セールが示したのは、システムの概念史を組みなおすことで有機体を熱力学的かつ、情動的なものとして捉えられることができるようになるということである。そして、それによって、雑音を妨害者から、むしろシステムの構造化に寄与するものとして記述することが可能になった。それと同時に、システムにおける観測者という視点が生まれた。最終的には、この過程は意味のないものとして言語をとらえることしかなかった情報理論に、観測者を組み込むことによって、意味を付与することを可能にしたのである。それは、身体というシステムを通過することによって生まれるのである。

さて、このような有機体の新しいオルガノンはどのような可能性を秘めているのだろうか。

しかし、これより私は、観測者が立ち居地をかえるとき、主体が客体となるときに、生じることを理解し、説明する。それは、妨害物が情報にかわる時ののだ。内省が経験にかわる時。そして、心理学が物理学に変わるときでもある。反対に、客体が主体に変わるときには、その自律性は一時的に増大する。

〔中略〕そこから予期しなかったわけではない再発見が生まれる。主観的なものの領野と客観的なものの領野とがもはや排除しあわないのである²³。

セールは、ここで議論を主体と客体という伝統的な哲学的対立に問題を拡張しようとする。ここでは、観測者が立ち位置をかえることが主体から客体への移行へと読みかえられている。そして、この読み替えを行うことによって、この伝統的な対立、その論理的背反性を互解させることが可能になるのである。

では、この読み替えはどのようなことを意味しているのだろうか。セールにおいては、観測者がシステムの内部にいて観測を行うことから、システムの外部にいて（とはいえ入れ子状をなす有機体のシステムのモデルにおいては、これもまた次の段階のレベルのシステムの内部であるのだが）観測を行うことが、主体から客体への移行とされているわけである。そして、これらの入れ子状をなすシステムは、先ほどの「言語の起源」をめぐる議論によって、言語的機能によって一般化することが可能な同一の構造を供えていることが明らかとなった。ここで、セールは、有機体のシステムの観測者が、このシステムを観測する手段の持つ構造を、類比的にシステム全体へと読み込むのである。つまり、われわれは、有機体というシステムの内部にいて、その入れ子状をなしている諸システムの最終段階の箱の中にいる。われわれは、最終段階のシステムの内部を観測しているのである。このとき、われわれは、情報と雑音という対を、快感と苦痛というカテゴリーでうけとる。

ところで、このカテゴリーを受け取る手段は先ほどセールが古典主義における内部感覚や、心理学における体感というかたちで、記述されるものなのであった。ここで、観測者が内部にいて観測するというのが、主観的現象、あるいは、主体であるということが理解されるのではないだろうか。この内部感覚がたとえばデカルトにおいては、その正しさを証明する指標が何もないことから排除される対象となった「甘い」や「痛い」といった現象であったはずである。そして、システムの外部に観測者が存在するということ、内部に観測者が身をおくときには、雑音としてしか捉えられなかったものがそのシステム全体を説明するということは、これまでの議論で繰り返し語られてきたことだ。それはとりもなおさず、われわれが物理学として扱っている対象にほかならない。あるいは、有機体のシステムを外部から観測することなのである。セールがこの雑音をめぐる議論を主体と客体の対立の問題に読み替えているのは、このような過程を辿っているものということができる。

これこそが、セールの初期思想の特異性を表しているのではないだろうか。ある視点に身をおけば、雑音は確かに情報を伝達する妨害者なのである。しかし、また別の視点からは、雑音こそが言語における意味を生み出し、システム全体の組成に

寄与するものとして働いている。ある視点においては無秩序に属するものが、またあるときは秩序に与するものとなる。秩序と無秩序、客観と主観、そういったものがこれまでは論理的に背反であった。それは、それらの概念が互いに依存しあうものであったが故である。セールは、システムという概念のもとに全体と任意の視点を論理的に構造化することで、むしろそれらの視点における、という条件つきでの自律性を与える。そして、これらは言語的機能として一般化された先のプロセスから、同一の構造を持っているということが示された。異なるのは、どこにそれを観測する者が身をおいているのかで異なる、ということなのである。

これは直感的な理解からは遠く離れているがゆえに、システムの概念史を有機体へといたるものとして辿り、この新しいシステムの中に雑音を規定し、さらに、そこでの機能としての言語を明らかにすることを必要とした。これは『干渉』で述べられている〈新新科学的精神〉の哲学によって可能となるモノダの世界の記述の変奏であり、また『コミュニケーション』で述べられている網の目の構造の変奏であり、また、『翻訳』でのこれらの実践の設計図でもある。そして、このことこそが、『ヘルメス』と『五感』とのセールにおける科学認識論的立場と、科学中心主義批判からの感覚主義礼賛の立場との共存を論理的に裏付けるものでないかと思われる。そこには、この主体と客体の対立をシステムに観測者を組み込むことで発生する視点の存在によって解消するセールの論理的構造化が前提されているのだ。

そして、そこからは、次のような問いが生まれることになる。有機体は入れ子状のシステムを構成し、そのシステムの構造的特性こそが、システムからの言語の形成を可能にし、なおかつ、主体と客体の対立を解消させたのであった。では、この開放系のシステムを無限に入れ子状の構造が続くものにするのではなく、有機体としてのシステムの極限を形作っているのはいったい何なのであろうか。この有機体は、生ける有機体 *organisme vivant* と呼ばれていた。そして、この有機体こそが概念史において振り返られたあらゆる歴史上のシステムの中心に位置し、それらを言語によって理解することを可能にしているのだとすれば、システムの中心にあるのは生命だとはいえないだろうか。ここから、セールの哲学における生命概念を明らかにすることができるのではないかと思われる。また、「暗騒音」においては、個々のシステムの内部における情報—雑音の対が、われわれにおける意味を担った言語である、ということがしめされたのであった。したがって、セールは主観的言語と客観的言語の区別を行っているのではないか、という推測がここに立てられることになる。「暗騒音」には『ヘルメス』から一見は断絶され矛盾した存在にも思われる『五感』を関係付けることを可能にする論理が潜んでいるのである。

-
- ¹ Serres, Michel : *HERMES IV. La distribution*, Paris, Minuit, 1977, p.9.
² *Ibid.*, p.10.
³ Crahay, Anne : *Michel Serres La mutation du Cogito*, Bruxelles, Boeck universite, 1988, p.21-43.
⁴ Harari, Josué. Bell, David B.: *Michel Serres Hermes Litterature, Science, Philosophy*, Baltimore, Johns Hopkins University Press, 1982, p.23-25.
⁵ *HERMES IV. La distribution, op.cit.*, p.259.
⁶ *Ibid.*, p.259.
⁷ *Ibid.*, p.259.
⁸ *Ibid.*, p.260.
⁹ *Ibid.*, p.260.
¹⁰ *Ibid.*, p.261.
¹¹ *Ibid.*, p.261.
¹² *Ibid.*, p.261.
¹³ *Ibid.*, p.261.
¹⁴ *Ibid.*, p.262.
¹⁵ *Ibid.*, p.262.
¹⁶ *Ibid.*, p.263.
¹⁷ *Ibid.*, p.264.
¹⁸ *Ibid.*, p.265.
¹⁹ *Ibid.*, p.265.
²⁰ *Ibid.*, p.267.
²¹ *Ibid.*, p.266.
²² *Ibid.*, p.267.
²³ *Ibid.*, p.271.

L'«organisme vivant» et le «bruit» chez Michel Serres

Yuiko AGATA

À quoi renvoient l'«organisme vivant» et le «bruit» chez Michel Serres et quel rapport fondamental existe-t-il entre ces deux notions au cœur même d'*Hermès*, et dont les analyses jusqu'à aujourd'hui n'ont pas suffi à mettre au jour leurs caractéristiques philosophiques profondes.

Dans cet article, nous analysons l'un des chapitres de *La Distribution*, qui constitue le quatrième tome d'*Hermès*. À l'aide de la Théorie de l'Information, Serres y reconstitue l'organisme vivant comme un nouveau système, et montre la fonction centrale du bruit dans la mise en place de ce système. Cette théorie demande un perspectivisme vis-à-vis du concept même de l'organisme. En étant à la fois un «bruit» d'un côté et une «fonction» de l'autre, le bruit fonctionne en définitive comme un redresseur. Nous montrons ainsi que le bruit n'est plus un obstacle au système communicationnel mais que, plutôt que cela, il contribue qu'contraire à l'organisation et à la reconnaissance de la communication.

De ce fait, Serres conclue que les concepts de l'«organisme vivant» et du «bruit» servent à éliminer le conflit traditionnel entre le sujet et l'objet, ce conflit dépendant désormais du point de vue. Et c'est exactement ce qui caractérise la pensée de Michel Serres dans *Hermès*.